だいたい月刊
8月号
萌木の村
新聞
MOEGINOMURA SHINBUN
Vol.2

ホール・オブ・ホールズ誕生秘話

「清里を文化の薫る避暑地に」オルゴールに込めた願い

萌木の村のオルゴール博物館「ホール・オブ・ホールズ」には、世界中のコレクターが垂涎の眼差しを向ける貴重なオルゴールたちが揃う。手前味噌といわれようが、そこにあるのは間違いなく本物の中の本物だ。ピアニストとオルゴールの共演という新しい試みも始まった。本物の音に包まれたいのなら今すぐ、ホール・オブ・ホールズへ行かれたし！

1989年当時のオルゴール博物館。現在の駐車場は一面のコスモス畑。モノクロ写真は完成直後の写真。スーパーマン舩木上次、満面の笑みすぎ。

DO YOUR BEST AND IT MUST BE FIRST CLASS — PAUL RUSCH —
KIYOSATO MOEGINOMURA
萌木の村

発行：萌木の村
〒407-0301
山梨県北杜市高根町清里3545
tel.0551-48-3522
fax.0551-48-3550

Editorial:Nakajimagumi
Text:Hironori Nakajima
Photo&Illust:Masayuki Kobayashi
Design:Kikuno Shimizu

なんだ、この不思議な物体は？我楽多市で運命の出逢い！

ポリフォン104型
舩木上次が初めて出逢ったオルゴール。現代のレコード盤の原型とも言われるディスクを使ったオルゴールで1ペニーコインを入れると演奏が始まる。パブに置かれ人々の耳を楽しませた。

一九八四年、舩木上次はミュンヘンのホテルで目覚めた。窓際に立ち雑踏を眺める。なにやら、のみの市のようなアンティークフェアが開かれていた。重厚な家具から、どう見つくろってもただのガラクタでしかない物まで様々な商品が置かれていた。その時、彼の視野の片隅に飛び込んできた物があった。その名はオルゴール。19世紀の終りにスイスの時計職人によって発明されたオルゴール。貴族たちだけのものだった音楽を大衆が手軽に楽しむために作られた機械。これだ！清里を変えるのはオルゴールだ！遠い異国で舩木はそう確信した。

その頃清里は一大ブームを迎えようとしていた。喜ばしい反面、街並みや景観を無視した無計画な開発も進む。これではいけない。ブームで終わってしまう。ある人物の助言を受けた舩木は、ドイツ、オーストリア、スイスをまたぐロマンチック街道の街並みを学ぶ研修の旅を企画する。そこにあったものは美しい街並みだけではなかった。そぞろ歩くだけでなんだか賢い人間に生まれ変われそうな文化の香りがぷんぷんと漂っていた。舩木の心の中に清里かくあるべし！の思いが固まりつつあったその道中で心を鷲掴みにされたディスク・オルゴール「ポリフォン104型」。この俺が清里を、オルゴールで文化の街にするんだ。

オルゴールを求めて世界各国を行脚していた頃。一番下の写真でビールを飲んでいる人物が、ヴィオリーナを復元したジークフリート氏その人だ。

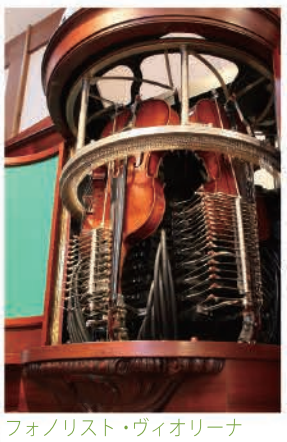
ホール・オブ・ホールズただいま、発展途上中！

一九八六年クリスマスイブ。念願かなってホール・オブ・ホールズはオープンする。音楽が好きでも、分かりもしない一人の経営者によるまったくの無知からのスタート。一筋縄ではいかないオルゴールコレクターの世界。だまされ、怒り、納得し、感動し、幾多の困難の末に、世界屈指のコレクションを誇るオルゴール博物館は完成した。今や清里はロマンチック街道に負けない街並みを文化の香りが包んでいることだろう。あれれ、ブームが過ぎ去り残された乱開発の無様な建物が駅前を汚してはいませんか？文化の香り？あまりしませんなあ。

しかし悲観することはない。オルゴールは健在だ。清里の自然が育む魅力も健在だ。ホール・オブ・ホールズはその使命を果たすべく発展途上中だ。頑固でおしゃべりな世界屈指のオルゴール職人からは、文化の体臭がしまくっているし、オルゴールと共演する妖艶なる二人のピアニストはまちがいなく本物だ。オルゴールの魅力を伝える語り部たちも続々と育ちつつある。オルゴールを中心にした清里再生の道は挫折したわけではない。今始まったばかりだ。「本物を見たり聞いたり出逢ったりした時から、本当に豊かな人生は始まる」船木上次の清里に込める祈りは、いささかも褪せることなく現在進行形のままである。

リモネール1900　1900年のパリ万博のために作られた大型自動演奏オルガン。アールヌーヴォー様式の美しい装飾を誇る。その大音響は鳥肌モノの迫力だ。オーバーホールしたのはザ・職人、脇田直紀。あまたの職人が修復できなかったリモネールを一発で修復。

ホール・オブ・ホールズの地下展示場には平安から昭和初期までの伝統食器のコレクション3万点がある。設計士、永坂定夫氏のコレクションだ。萌木の村の主要な建物をほとんど手弁当で設計してくれた萌木の村の恩人である。



フォノリスト・ヴィオリーナ
1910年ごろドイツで生まれ、1992年にドイツ人ジークフリード・ヴェンデル氏が復元。3挺のヴァイオリンをさかさまに組み込んだ面白い自動演奏楽器。この復元には大変な労力と費用が必要で、ジークフリード・コンペンションなるものが開催され募金を募った。その申し込み第一号が、何をかくそう舩木上次である。

「夢の王国」を清里に作ろう！天才ピアニストは、決めて来た。

Mokichi Hirasawa

平澤真希は、そんじょそこらのピアニストではないのである。なんたって日本のことを良く知らない。ヨーロッパのことはやたら詳しい。ショパン音楽大学院に留学しただけでもすごいのに、主席で卒業しちゃったりする。俳優の山本圭さんとトークコンサートを開いちゃったりもする。萌木の村にいないときは世界中でコンサートを開いているらしい。なぜに清里にいるのか良く分からない。彼女の愛してやまないピアノの恩師と玄関にあるオルゴールが同じ名前レジーナだったというだけで目元がウルウルする感動屋さんだ。「オルゴール博物館には波動がいっぱい詰まっているの。自然の波動、この建物を建てた職人さんの波動、オルゴールからの波動、オルゴールを愛する人たちの波動、オルゴール職人の波動、もう波動だらけ。それが感じられるだけでもここに来る価値があります。私がピアノとトークでしていることはほんのちょっとのお手伝いだけ。お客様の想像力をちょっとだけかき立てて、感動をクリエイトするだけ」鳥のさえずりに、木の曲がり方に、夜空の霧に、なんにでもすっご～い！と、感動する彼女はまわりのみんなにも夢と感動を分かち合いたくて仕方がない。「萌木の村にあるオルゴール博物館を夢の王国にしたいの。来る人が感動と新たな夢を持って帰っていけるような夢の王国に」目をキラキラさせて語る年齢不詳美人の彼女からは、感動オーラが出まくっている。演奏の後、話しかけてみよう。きっと愉快な気持ちになれますよ。ちなみに今度、オリジナルCDが発売されるらしい。みなさんこぞって買いましょう。

♦私の愛するオルゴール

チッカリング9フィート・アンピコグランドピアノ

チッカリングは、1800年代の名作曲家でありピアニスト、リストが愛した唯一のピアノと呼ばれているんですよ。このピアノを演奏できるだけでも萌木の村にいる価値がある。もう大感動です。そのチッカリングに1920年ごろ自動演奏機能を組み込んだものがこれ。リプロデューシングピアノといって、ラジオやレコードが普及する前の時代に、ピアニストの生演奏がほぼ忠実に再現出来るんです。そのタイトル150曲。弾きたいし、聴きたいし、毎日が楽しくってしょうがないの。

世界一頑固なオルゴール職人は地球一、おしゃべりで楽しい。

Mokichi Hirasawa

脇田直紀は、世界中の名器のメンテナンス、オーバーホールを手がけるプロ。あるいはオルゴール博物館の守り神。彼が受注製作するオリジナルオルゴール「オルガネッタ」は、今注文したとすると納品は7年先になるという。もともとはパイプオルガン職人。スペインのサラマンカ大聖堂のパイプオルガンを修復した経歴を持つ。そんな彼がオルゴール職人に転身した理由は何だろう？パイプオルガンの音色はとても美しい。その大音響は感動なくして聴くことはできない。でもすごく高価だ。大聖堂でしか楽しめない。酔狂な大金持ちにしか楽しむことができない。パイプオルガンの音色が大好きな人が、少し頑張れば購入できる値段で販売できたら。車一台分の値段。試行錯誤の始まりだ。ああでもない。こうでもない。そして出来た。手回し自動演奏オルガン「オルガネッタ」大240万円、小150万円也。手回し速度が思いのまま、絶対に飽きが来ない。「儲けたくて作っているわけじゃない。パイプオルガンの音色に魅せられた人々が手軽に楽しめるオルゴールをつくりたかった」だけだ。逸話も多い。某国のお金持ちが所望した。金に糸目はつけないから今すぐ売ってくれ。NO!オルガネッタは手づくり楽器としては超格安。数倍の値段で買ってくれるなら超ラッキー。でもNO!この音をもっとシンプルなデザインで聴けないだろうか。装飾をほどこすのをやめてくれないか。NO!装飾は手間がかかる。それ無しで同じ値段なら儲けものだ。でもNO!硬派だ。男だ。据え膳は食わない。モテモテだ。でも寡黙とは無縁だ。戦艦大和の話は長すぎる。

♦私が世に問うオルゴール　オルガネッタ２型

オルゴールを作ろうとは思ってなかったんですよね。パイプオルガンのあの美しい音色を、コンパクトで部屋におけるサイズの機械で再現できないかってのがスタートでしてね。もちろんオルゴールも参考にしましたよ。萌木の村に出逢ったのもいろんなオルゴール館を見てまわったおかげですからね。いっぱい試作しましたね。で、行き着いたのが大道芸人の使う手回しのストリートオルガン。でも音のクオリティは低い。パイプオルガンのクオリティをストリートオルガンにってことで完成したのがオルガネッタです。自信ありです。

毎日毎日、ピアニストと一緒に、ニコニコしながら手回しオルガン回してます。

Shinji Fujiaki

ホール・オブ・ホールズはオルゴールを聴くために作られた建物です。この重厚な木造建築が素晴らしい音の反響を生み出しています。演奏後、外に出ると清里の大自然。最高の環境です」清里に来たら舩木伸に会わないで帰ってはいけません。

うか。それは違います。色んなオルゴールがあるんです。音色もそれぞれ違えばパフォーマンスも違う。そ

Akko Nakao
じゃじゃ馬ピアニスト
音楽を通して世の中にもの申す。

成尾亜矢子は一見、清楚な美人ピアニストだ。なんたって準ミス日本を務めたことがあるってんだから美人に決まっている。スタイルもいいに決まっている。でもそんなところに目を奪われてちゃいけません。美しいピアノ演奏を聴いてください。遠くオルゴールが生まれた時代が脳裏に浮かんでくるような絶妙なトークに耳を傾けてください。そんな別嬪さん近寄りがたいって、そうおっしゃらずに演奏の後、話しかけてみてはいかがですか？オルゴール博物館に何度か足を運んでいただいて彼女と仲良しになってください。本当の彼女が顔を出すかもしれませんよ。ハットウォールデンのBARパーチで、一杯やるといいかも。大阪出身の彼女のポンポン小気味よく飛び出す関西弁に圧倒されることだろう。かなりのじゃじゃ馬ピアニストだ。瞬間湯沸かしピアニストは怒ったり泣いたり笑ったり、それはそれは忙しい。そんな彼女の笑顔の奥には苦難を乗り越えた過去がある。宝塚歌劇団を目指していた頃の膝の手術、強度のアトピー性皮膚炎、追い討ちをかけるように自宅の焼失、ショックで人前に出られなくなったこともある。故国ポーランドを失ったショパンに自分の境遇を重ね合わせ奮起する。「小さな幸せや希望を見いだしながら生きることの大切さを、ピアノを通して伝えていきたい」広島の原爆で奇跡的に残った被爆ピアノの演奏をはじめ、地域の街おこしコンサートや学校教育や社員教育の現場でのコンサート等、今の病んだ日本社会をより良くしたいと、さまざまな活動に取り組んでいる。ものすごく志の高いじゃじゃ馬ピアニスト、一見の価値あり。

◆私の愛するオルゴール
インターチェンジャブル・シリンダー・ミュージカルボックス

このオルゴールはスイスのジュラ地方の時計職人さんが作ったものです。スイスは伝統的な時計作りの国です。スイスののどかな片田舎、時計のない時代を想像してみませんか。時を告げる鐘つき役の人は毎日毎日、やぐらに登って鐘をつく。しんどくて大変。きっとそのしんどさを解消しようと生み出されたのが時計。時計職人は毎日毎日、時計を作った。ちょっと飽きたなあって時、遊び心で作ったのがこのオルゴールじゃないかって。想像するだけで楽しい。萌木の村ののどかさにも通じるものがありますよ。

Junichi Masuyama
ピエロだ！
いやちがう。オルゴール職人だ！

ホールで日々オルゴールの魅力を伝えるスタッフ、オルゴールの語り部達。彼らを束ねるのがこの軟弱そうな、もとい、笑顔が素敵な好青年、舩木伸だ。「オルゴールと聞くと、皆さま小さなおもちゃのようなものを思い浮かべるんじゃないんでしょうか。音色もそれぞれ違えばパフォーマンスも違う。そんなオルゴールの魅力を30分という短い時間の中で満喫して頂けるよう工夫しています。伝え教えるというよりも、お客様と共感しあうことが大切。感心して、笑って、感動してもらいたい。最近お客さんに、解説が素晴らしかった！とお褒めの言葉をいただくことが多くなってきました。ありがたいことです」ニコニコしているだけではなかったのだ。「ホール・オブ・ホールズ」音楽を通して日々オルゴールの魅力を伝えるスタッフ、オルゴールの語り部達。彼らを束ねるのがこの軟弱そうな、もとい、笑顔が素敵な好青年、舩木伸だ。「オルゴールと聞くと、皆さま小さなおもちゃのようなものを思い浮かべるんじゃないんでしょうか。

ある時は100年前の手回しオルゴールを奏でる大道芸人ピエールJUN。そしてある時は見事なジャグリングとマジックを披露する手品師ダンディJUN。しかしてその実態は、オルゴール博物館のオルゴール技師であり、オルゴール製作体験教室の先生であり、自らもオリジナルオルゴールの製作を手がけるオルゴール職人、名取淳一。彼はさまざまな顔を巧みに使い分けて村内をうろついている。イベントがあればピエールJUNに変身し愉快なピエロとなってお客さんを楽しませ、夜は夜で、ロックでダンディJUNに変身。各テーブルに驚きの歓声を上げさせる。スキンヘッドにサングラスはやや強面だが。彼は今、オルゴールと自然のコラボレーションという難題に取り組んでいる。題して「自然感オルゴール そらごーる」ソーラーパネルで音楽を奏でる。雨の日は演奏しない。晴れた日しか聴けない。でもそれでいいという。オルゴールは自然とともにだ。いろいろ試作中だ。雨に反応して鳴る。朝日にしか反応しない。夕焼けで鳴る。ホントに作れるのかJUN？頑張れJUN！

◆私の提案するオルゴール　そらごーる巣箱バージョン

思いっきり宣伝させていただくとして。そらごーるは自然エネルギーで奏でるオルゴールです。具体的には太陽の力。ソーラーパネルで発電します。流れる音色も自然の音をモチーフに製作しました。自然とのコラボレーションを目指しています。それと、今までのオルゴールではメーカーが作った曲しか聴けなかったんです。そこいらも何とかしようと思い、パソコンで簡単にオリジナルの曲をお客様自身で作曲できるプログラムソフトも用意しました。ネットからダウンロードできます。
16,700円からです。よろしくで～す。

◆私のおすすめオルゴール　シンギングバード

ホール・オブ・ホールズの玄関入って階段登った右手、何やら楽しげなオルゴールがあるじゃないですか。あれです。100円いれると演奏が始まります。オートマタといって小さな自動人形達が踊り始めます。とっても楽しげに踊ります。これ中世ヨーロッパの晩餐会をイメージしているんですね。全然飽きませんよ。何百円も使っちゃいます。そうそう、鳥の人形も楽しげにさえずります。これリアルな鳥の鳴き声を吹き込んであるんですよ。愉快なオルゴールの曲と、本物の鳥のさえずり、2曲分楽しめちゃいます。ご来館お待ちしています。

●開館時間　10:00～18:00（最終入館17:30）
●入館料：一般800円　小～大学生500円　小学生未満無料（「オルゴール演奏」入館料に含む）
「ピアノ演奏＆オルゴール演奏」入館料＋500円
●演奏時間　10:15～10:45オルゴール演奏／11:00～11:50ピアノ演奏＆オルゴール演奏／
12:15～12:45オルゴール演奏／13:15～13:45オルゴール演奏／14:15～14:45オルゴール演奏／
15:15～15:45オルゴール演奏／16:00～16:50ピアノ演奏＆オルゴール演奏／17:15～17:45オルゴール演奏

大工雨宮とゆく「滝見の丘」

萌木の村の絶景ポイント「滝見の丘」。開拓の鐘をスタートに森の中をくねくね進む遊歩道の先にある。スタスタ歩けば者の5分で到着する道のりだけど、ここはじっくりゆっくり時間をかけて歩きたい。山あり谷あり右に左に。遊歩道はまるで人生そのもの。足元を、頭上を、道の脇を、きょろきょろしながら時間をかけて歩いてみよう。「ほら、早く行くぞ！」などと決しておっしゃらずに。

名づけて「おっぱいの木」枝が折れた痕を木自身の治癒力がふさぐ。思わずさわりたくなる妖艶さ。

人類の進化に真っ向から逆行する手道具大工、雨宮がまず目をつけたのは「家」。ペンキ塗りたての巣箱、色褪せして森と一体化した巣箱、そして栗毛虫の巣。どれも家だが全部ちがう。この３つを見ながら人類の進化の是非について考えてみる。遊歩道の新たな楽しみ方だ。

どうやって高いところまで伸びていったのか？山漆のつるに悩むのもいい。虫だってうじゃうじゃいるし、切り株を踏めば怪我をする。子どもに大自然の懐の深さも、危険に満ちた恐さも教えられる。

遊歩道をまっすぐ歩いたってつまらない。時には道を外れてみよう。さっそく登ってほしいと言わんばかりの木を発見。ピアニスト登る。無邪気だ。

素敵男女に遭遇したところには、大きな石があり道幅がせまくなっている。肩を寄せ合わないと通れない。近くには抱き合うように絡まりあう二本の木。この場所を寄り添いの地と名づけたい。

ここまでウイウイしいと見ていて腹が立つほどの素敵なカップルに遭遇。やっぱ森には無垢な姿が良く似合う。どっちが近道だなどと言う無神経親父にはご遠慮願いたいものだ。

どうやって木に包み込まれたのか？根元にポツンと石がある。長い長い時間をかけて一体化したのだろう。遠い昔に思いを馳せていると、大工雨宮が言う。おちんちんみたいな石ですねえ。やっぱりエッチだ。

この木、何に見える？天狗、超人ハルク？大工雨宮にはおちんちんに見えるそうだ。とてもエッチだ。

滝を眼下に望むちょうどその位置にある石。どうぞお座りくださいと言わんばかり。山の神様が親切にも置いてくれたにちがいない。

ようやく滝見の丘に到着。所要時間１時間強。こんな短い道のりにもいろいろ発見があるものだ。時間をたつのを忘れてはしゃごう。ゴールの崖に真横に生える一本の木。根元にかかる力は計り知れない。ここでも大自然の深遠さに触れることが出来た。

人一人が横たわれるほどの石の家を発見。熊の棲家か、はたまた縄文人の休憩所か？ピアニスト平澤、さっそく入居。どこまでも無邪気だ。

いったい何百年前に芽吹いた栗の木だろう。人生の酸いも甘いもとことん嘗め尽くした長老のよう。この栗を「人生の木」と呼ぶことにしよう。